

A woman with long dark hair, wearing a white sleeveless dress, stands in a room. She is looking towards the camera. The room has a large window in the background, and the lighting is soft. The overall style is elegant and classic.

英雄

おとめ

墮天

下

R18  
カルビ  
焼肉文庫

## ※注意※

この本は成人向けです。  
未成年の閲覧、購入を禁じます。  
この小説の著作権は「サークル：焼肉文庫  
作者：カルビ」にあります。  
無断での複製、転載、インターネット  
へのアップロードは禁止です。

英雄  
お♡とめ  
墮天



カルビ

焼肉文庫

1 2	1 1	1 0	9	8	7	6
エピソード・終	堕ちきった雌豚英雄	地獄の幸福	絶望の帰還	哀れな雌豚おとめ	憎悪に恋願う	隷属王妃
・ ・ ・ ・ 1 3 0	・ ・ ・ ・ 1 1 1	・ ・ ・ ・ 7 5	・ ・ ・ ・ 5 8	・ ・ ・ ・ 3 0	・ ・ ・ ・ ・ 8	・ ・ ・ ・ ・ 6

## これまでのあらすじ

英雄騎士と名高い青年ロアス。

魔王ゲゼルガから国を守るため、最後の戦いに挑むも敗北し淫紋を肉体に刻まれ、姫を盾にとられて魔王の奴隷妻になる。

仲間たちが見ている前での陰茎去勢処刑、結婚式で犬のよう精液を啜りながらスライム浣腸と脱糞。王妃となった日常生活でも誰かに見られながらの排泄を強要され、人目がないと排泄ができないよう調教されてしまう。魔王を憎んでいた心は淫紋と魔王の放つ魅了魔法により徐々に心を蝕まれていき、ついには鼻で精液を吸収してエネルギーを得るという淫惨な仕打ちを受けながら愛欲に墮落していった。

## ロアス

英雄と謳われている王宮騎士。姫のことを大事に想っていた。幼い頃、王国を攻めに来た魔王軍によって家族を殺されている。現在は魔王ゲゼルガに囚われ、魅了効果のある淫紋を体に刻まれて、王妃として従属している。

## 姫様

ロアスの主で相思相愛だと信じている。

## ゲゼルガ

王国の支配を目論む魔王。

ロアスに並々ならぬ執着心と独占欲を抱いている。

## コンケーロ

魔王の腹心。王妃ロアスの情夫。黒い鱗のリザードマン。

## 6 隷属王妃

「おめでとうございます魔王様」

「王妃様との仲睦まじい姿、微笑ましい限りです」

「ふふ、世辞はよせ」

魔王ゲゼルガとその妻隷属王妃ロアスの結婚一周年パーティー。

一年前に結婚式をおこなった大広間には、多くの貴族たちが集まっていた。

「王妃、其方も礼を述べるのだ」

「はい、魔王様」

お辞儀しながら王妃はドレスを捲る。

ジョロロ、ジョボボ。ジョロロロオ〜。

尿道から漏らしながらも普通に、息することが当たり前のよう人前で小便を垂らす。恥ずかしさも激しい快感を覚えるわけでもなく……いや、肩が微かに震え紅潮する頬から緩やかな快感はあるのだろうか。

「このたびは……おおお♡ ありがとうございます……っ♡ 心から、感謝、もおしあげっ♡♡♡」

魔王も他の家臣も兵士もなにも嘲笑も嫌悪もしない。当たり前前の風景なのだ。

王妃も捲り上げていたドレスを綺麗に戻し、何もなかったよう一礼してから「他の方々にも挨拶をしてきます」と魔王の元から離れていく。王妃が去ったあと魔王は顔を俯かせ、やがて体を小刻みに揺らしながら地響きのような高笑い。

「ああ、我が雌豚のなんとも下品で愛らしいことか……！」

しばらくとまらない魔王の笑い。笑いが収まりかけた時、王妃のドレスの真下からスライムが顔をだしてきたのを見て、また笑いが収まらなくなってしまった。

## 7 憎悪に恋願う

それはある日の屈辱的な淑女修行を終えていきなりの申し出だった。

「どうです、お妃様、私と恋仲になりませんか？」

「なんですって」

久々に低い声がだが、男の頃とはあまりにかけ離れた声だった。

飛び散った浣腸薬とザーメンが飛び散る床で片膝ついて頭を垂れる魔王の右腕將軍、コンケローを忌々しげに見下ろす王妃ロアス。絡みつくような冷たくも執着じみた黒い目にロアスは身震いしてしまう。

「騎士と妃の宮廷恋愛は人間の間でも認められているでしょう？」

不倫とはまた違う、妃と騎士のプラトニックな恋愛。それは王宮で公然と行われる恋愛遊戯。コンケローはそれを持ち掛けているのだ。

「ふざけたこと言わないでください。わたくしが貞操を誓ったのは陛下おひとりです」  
コンケローは変わらず嫌いだ。



魔王ゲゼルガによって男らしかった気性はすっかりなりを潜め、人格が変わっても、記憶はそのままで。魔王の妻ロアスではなく、人々の英雄騎士ロアスだった頃、コンケーロに大勢の仲間を殺され苦汁を飲まされた記憶は残っている。

「大勢の兵士に股を開いて喘いでいますのには？」

「……奉仕活動は高貴なる貴婦人の、務めです」

鼻で嗤われるのが悔しい。騎士の頃ならば拳一つ叩きこめた。

「ならば、あの可憐な姫君を私の花嫁に仕立てるのも一興ですな」

「……！」

「魔王様が狙っていたので、諦めていましたが、アナタと結婚されたいま、私が姫様を花嫁に頂いてもなんの問題ありません。今度の長期遠征のさいにでも、片手間に攫ってきて……まあ、恋人でもできたら花嫁について考えるのはまだ先でもいいのですがね」  
舌がチロツとはみでたのが見えた。きっと笑っているだろう。

（姫、姫様、わたくしの花）

「おお」

コンケーロの右手を無造作につかみ上げ、手の甲へキス。身体中に鳥肌が立つ。

(私の心身は既に魔王様のモノ、肉体すら色情に墮ちて穢れきった身。だが貴方にだけは、心を渡してやるものですか)



コンケローロとの逢瀬は決まって午後。微睡みを覚える時間に恋人として蜜月を重ねるなど、まるで悪夢だ。しかし姫を人質に取られているいま、どうすることもできない。

「お待たせさせてしまいましたね」

「このまま来なくても良かったのよ」

庭園の東屋での逢瀬が恋人となった二人の時間になる。

冷たく言い放ちながらも、用意していた彼の分の紅茶を注ぐ。騎士の頃は、紅茶の淹れ方なんて知らなかったが、今では旦那のゲゼルガにも淹れている。腕前は執事悪魔からのお墨付きだ。

「砂糖と蜂蜜を一匙ずつだったかしら」

「覚えておいてくれたのですね。光栄です」

「陛下のついでに覚えていただけです。思い上がりしないでください」

「ほお、ゲゼルガ様の好みも覚えているのですか」

「ゲゼルガ様は、砂糖三つに蜂蜜二匙よ」

「頭を使いますから、甘いものもそれなりに必要なものでしょうね」

紅茶を飲む二人。しばし沈黙。庭園のどこかで小鳥が鳴いている。

「……貴方は紅茶を飲むだけで興奮するの？」

不意に鼻につく強烈なイカ臭さ。

冷やかな視線を受け流し「ここ最近激務だったので」と平然としている黒竜人の将軍。

「王妃様の唇を見ていたら、つい。しかし、ふふ、さすがに敏感な鼻をお持ちですね王妃様。

私はまだ勃起はしていないのですが。ふふっ、本当に」

「……っ」

ザーメンから精気吸収できる身に改造されてからさらに雄に対して、あらゆる感覚が過敏になってしまった。わずかな雄の体臭ですら嗅ぎとることができたり、一目で発情している雄を見抜いてしまう。

「どうか、その美しい足でスリットを慰めていただきたいものです」

「……っ、この、変態が……！」

ハイヒールを脱ぐ。黒いストッキングに覆われた爪先がテーブルの下、コンケイロの股間を弄る。足の裏で弄り、ヌルとした泥濘、スリットを探り当てる。一定の魔物は直接生殖器をぶら下げてはおらず、スリットの中に閉まっており性的興奮を覚えて勃起したペニスを露出させる。

「はあ……ふう……ふううっ」

ぬちゅくちゅ、くちゅ、ぬちゅ。

爪先が肉の裂け目に触れる。ゲゼルガに負けず劣らずの雄棒を想像しそれを自分の尻孔に――想像するだけで頭が熱くなり腹の奥が熱を孕む。

（ああいや、本当にイヤ！ こんな奴相手になんて恥知らずな体なの！ わたくしが求めるのは、ゲゼルガ様ただおひとりだというのに！）

誰彼かまわず「雄」と見れば昂ぶる自分の体が嫌になる。

「段々と足の動きが激しくなってきましたね」

「はあ、だまって！」

ぐちゅ、ぬちゅ。ぶちゅ、ぐちゅ。

ストッキングにカウパーが染み皮膚と爪が濡れ、ロアスの尻蕾も興奮と共に、愛液を分泌させ菊皺がぐちゃぐちゃにさせていく。コンケーロを慰めているのに、自分が自慰で足を動かしているように錯覚してしまう。

ぶるんっ！ 鱗に閉ざれているスリットが開き、勢いよく長大ペニスが飛びでた。

生々しい肉の弾力。足の裏に亀頭の弾力と汁のぬめり、一段と空気に雄臭さが混じり鼻腔粘膜をグズグズに劈っていく。

ビクビクッ！ ぶぢゆるるる！ ビクビクッ！

「はあ、つくううずはあああゝゝっ」

（いく、臭いだけで鼻がいぐ……！！）

鼻がヒクつき肩を震わせ、アナルから蜜が噴き出す噴射快楽。軽いアクメに脳が真っ白に埋め尽くされる。

「ひっぐう♡」

「相変わらず敏感な御方だ」

テールブルがどかさされ、大きく股を開いたコンケーロ。凶悪なほど赤黒い生殖ペニスがロアスは目を離せない。無自覚に生唾を飲みながら、床に手をつき這いつくばる姿勢でコン

ケーロの股間に頭を寄せた。股間の前でしゃがむとギョツとした。カウパーや精液とは違う異臭が鼻腔粘膜を刺激してくる。黒い皮膚はよくよくみると垢がたまっていた。

「おや」

コンケーロに顎を掴まれ、親指が唇を撫でる。

「その口紅はこの前、私が贈った物でしょう？　いつもは魔王様から頂く物しか身につけないというのに、ふふどうという心境の変化で？」

「……………」

（あまり冷たくあしらって飽きられて、姫様に目を向けられれば困るだけだからサービスしているだけよ）

答えなかった。大したことではない、少しでも姫から意識を逸らさせたいだけだ。

「それにしても激務で碌に身を綺麗にする時間もなかったの王妃様の唇で掃除していただけるなど身に余る光栄で」

「……………この、下種野郎」

思わず素の言葉が漏れた。チロツと赤い舌をだされて笑われる。明日の「お勉強」は激しいものになるかもしれない。

(けして、心を傾けているわけではありません。断じて、決して)

不意に尿道孔に気泡ができた。そのまま気泡は膨らんでいき、黄ばんだ液体が王妃ロアスの顔面に直撃する。

「ジョロ、ジョロボボボ」

「んっぐ?! ぐううううっ!」

「おっと失礼」

顔面に浴びせられる憎い雄の小便。鼻腔粘膜が刺激臭でグズグズにされ鼻水が垂れてしまった。ただでさえ垢塗れの肉棒が小水に浸され不潔になる。

「……こんな汚物を王妃であるわたくしに舐めろと?」

「こうすれば、多少は美味しいのでは?」

睨みあげる王妃をもともせず、黒竜人はテーブルの上から蜂蜜入りの瓶をとり、自分のペニスを蜂蜜塗れにさせた。

「その豊かな胸で包んで舐めしゃぶって欲しいですね」

「………んぶう、んぢゅうう」

笑っているだけの將軍を諦め、腐肉じみた雄棒を口へ含んだ。腫れぼったい唇が、ゆっ

くりと滑りながらペニスを呑みこんでいく。嫌悪しているはずなのに、改造された口は雄を含むだけであっという間に欲情して、恥垢塗れのペニスを喉奥まで咥えこんだ。

(喉の奥まで、んぐうう、入ってくるうう！)

青臭さと甘さと苦みが互いに主張しあっている。鼻の粘膜を刺激する異臭に涙が溢れてしまう。喉で肉棒の形をしばらく味わってから数往復し肉棒全体を涎塗れに。ドレスから乳房を肌蹴て乳圧で竿を愛撫するのも忘れない。勃起乳首と竿疣を擦り合わせると腰が跳ねあがる。

「んぶう、ねろ、ねろねろ、んじゅう！」

亀頭だけを口に含み軽く歯をあて吸いつきながら垢をとっていく。

ちゅぶ、ちゅっぼ、ちゅっぶ。可愛らしいリップ音で吸われる亀頭からの快刺激でコンケーロが目を閉じた。

「……ッ、雁首の垢も丹念にお願いしますね」

「うりゅねろお、ひゃいんぢゅうっ！ ぶうぢゅろおお〜」

亀頭を咥えたまま、雁首の溝へ舌を這わせる。竿を包み込む乳肉は汗塗れの乳肌と先走り汁が絡み合い、パイズリを滑らかにおこなう。凝った乳首が竿と擦りあうたびに、快樂



の火花が散っていく。

「お、おっ！ お妃様の口も胸も素晴らしい名器ですね」

「い、いいひやらア、はやくうんぶう、らしてえよお！ もう、いやあ」

舌が触れるたびに、雄棒が強張り熱く脈打つ。それなのにコンケーロが射精する気配がない。精気吸収が食事となったロアスは飢えを煽られて、嫌でも飢餓感と焦燥が渦巻いてくる。

「ごっく、んぎゅう、ごくごっくううう！」

(なんでコイツと、こ、こんなこと……んぐううう ♡ 精気吸収ううう ♡)

ジュボ、ジュボボボツ、ジュボボボ。

小便のよう流れてくるカウパー液を涙目で飲み干していく。腔内粘膜をとおって嫌でも力が漲り活力が溢れ出てくる。

「恋人なんですから一滴残らず飲んでくださいね？」

「ふう、っぐううう！ んっぐううう！」

頭を掴まれ先走り汗の強飲。喉仏が上下に動くさまをコンケーロが舌なめずりしながら見下している。

「いいですね、貴方の口をレイプするのは実に愉しい」

「おぼおんぶう、んぐうう、つぶぢゅううぶっひゅう♡」

（いや、もういやあ！　なんでコイツで感じてしまうの？　魔王様にお口ご奉仕している時のよう……っくううう♡）

ぬぢゅう、ずぶ！　ぬぢゅう、ずぶ！

頭を掴まれたまま、前後へ揺さぶられる。主導権が完全にコンケーロに変わり、ガンガンと亀頭が咽頭を突いてくる。頬が窄まっては膨らみ、頭と一緒に腰が動く。クリペニスは既に硬く勃起し、下着と擦れあって快樂電流を飛び散らす。

ドレスの中に自分から指を這わせてクリ陰茎を弄りだす。

「ふっぐうう♡　んっぐうう♡　ふっうううんぐううう♡」

「おやおや、自分からメスチ×ポ弄りだして……一緒にチ×ポで絶頂しましょうね」

ぬっぶぬっぢゅう！　ぐっぢゅ！　ぬっぶぢゅ！

頭部を引っ張られる痛み、酸素不足、雄の芳香。痛みと快樂の境界線がこんがらがり、さらに色欲を貪ろうと右指が一心不乱に自分の短小陰茎を扱く。潮を噴きそうになる寸前に先端を潰し抑えて射精寸前ギリギリまで抑え込む。

(らんれ、こんらこひよお……)

コンケローの言葉に合わせている自分に内心で首を傾げる。

「そろそろ、射精しますよ……!」

「ふっぎいいいい!」

鱗塗れの指に股を擦りあげられ、クリペニスが焼焦げた錯覚がした。あまりに刺激が強すぎる。そのまま、ギュッと抓られる。

「ほら、一緒に射精しましょ、う!」

「んっぶっぐうううっぎゅううううう——ッ♥♥♥」

ドッピユルウルルルウウッドッブウウウウ!

ぶっしゅ、ぶっしゅあああああああ〜!

流し込まれる白濁汁に頬が膨らみ、喉にみっちり粘土のよう詰った錯覚。短小陰茎からは互いの顔にぶっかけてしまふほどの潮が花芯から噴き上がる。

「ふっぐおっぐう! んぢゅうううううう! んぶっちゅぢゅううううううううううう♥♥♥」

熱塊を飲み干していき大量のあまり鼻から漏れた。グズグズに溶ける鼻腔粘膜に背筋に

甘露が走り、我慢していたぶんの解放感も素晴らしい。肉芽から断続的に潮噴きするたびに重々しいヒップが跳ね踊る。

「んっじゅじゅるるる……っぷはあ、ゲッホ、ごっほ……ハアハア……。あなたが、わたくしの、恋人でなかったら……魔王様に泣きついてでも、接近禁止に、させましたのに……!!」

「しかし実に私にデレデレではありませんか」

「なっ」

「私は王妃様に一切魅了を使っていませんし淫紋も発動させません。それなのに日に日に、王妃様は私にたいそう甘く鳴いてくれるではありませんか。今日に至っては、私が贈った口紅をつかってくれてねっとり口奉仕をしながら同時に射精しようとする懸命にクリチ×ポ射精を耐えていたではありませんか」

「うるさい!」

そんな王妃を意に介さず、コンケークの指先が臍を撫でてくる。途端に広がる淫紋からの甘美な電流。しかし淫紋は点滅しておらず力を発揮していない。

「んひ♡ ひっはああ♡」

「淫紋を撫でられるだけでアクメを覚えるとは」

服に隠れているのに的確に淫紋の模様をなぞられる。楽器を奏でる手つきで、コンケーロの黒い指がドレスを滑る。下腹部をなぞられるだけで四肢が震え、軽い酩酊を覚える隷属王妃が東屋の白い床で乱れ狂う。  
撫でられて。

「——♡」  
擦られて。

「——♡」  
抓られて。

「——♡」  
ッ

（わ、わらくひ、の体、こんな男に弄ばれて悦ぶなんてふしだらな、の）  
肉壺の奥がドロドロに熱く蕩けているのが嫌でもわかる。

不意に指愛撫がとまりこれ幸いと深呼吸して落ち着きかけた瞬間、チュウ、と鋭い感触。コンケーロ口が布ごと肌を吸い上げてきた。牙が繊維を貫通し肌を貫く。遅れて自覚した途端、ビリビリと微雷流が血肉を伝って脳の髓まで焼き蕩かす。

「くくくッい♡♡♡」

ぶぢゅ、ぶぢゅるううう。

肉壺が愛液を吐き出し頭が真っ白に霞む。

コンケロ口はさらにドレスごと淫紋を舐めてきた。チロチロと唾液に濡れた舌に淫紋を舐められながら、鱗だらけの手の甲と硬い爪が皮膚を摩擦していく。

「はあ♡ あ、やめ♡ もう、だめえ♡ やめ、てえ♡」

「お気になさらず。ふふ、王妃様にばかりご奉仕させるわけにはいきませんから、ね」  
憎い將軍の声が喋るたびに肌に息が吹きかかり、腰が踊ってしまう。

「しゃべりゆのらめえええええ♡」

「ならコレで」

「くくくくッああ♡あ♡♡♡」

ヂュツウウウ。噛みついた跡が残るほどの強いキス

「どんな気分です？ 憎い相手と愛しあうのは」

「き、きかりヤイでえ♡ いやあ、いやあ♡」

「言わなきや、あと一時間ほど愛撫しますよ」



素っ頓狂な声をあげながら黒竜人が腰を打ちつけ、勢いよく亀頭で最奥を叩いてくる。烈火の如く肉棒が滑り、前立腺を疣が連打で撃ちぬかれる。

「おおお?! これ、は、たまりませんねえ!」

支えとばかりにはち切れそうな乳房を掴まれる。爪が肉に食い込み「おっほ♥」と喘ぎながらロアスの脛が痙攣。

むっぎゅう、ぎっちい。むっちい、むぎゅむちゅう。

太い指の合間からもかるがると乳肉がはみだす。竜人の鱗塗れの皮膚で擦られ、胸を覆っていた布地がボロ布になってしまう。

「っおおっっぱあいぐうう♥っあなるあくめえひまひゆわああ♥っほおおおひゅっごいろいろおお♥」

「このまま、三時間たっぷりご奉仕してさしあげますからねえ」

「む、むっびい、ごお、ごんりゃのだえ〜っ♥♥♥」

淫紋を爪になぞられ背筋が張りつめる。ぶっべ、ぶっぼっ! 泡立った愛蜜が噴き出す。

泣き叫ぶ王妃を細めた目で見下げながら、宣言通りコンケーロに肉壺を責めつづけられた。射精することもなく、疣で前立腺を責めつづけながら淫紋への愛撫を受け不意打ちで乳首



を抓られる。

「じゅぎイいいい♥ だいぢゅぎイらがああああ♥♥♥ やべでえ、もうやべでえええ♥ おがじぐなりゆ♥ もっどいっぢやだったらおがじぐなりゆ♥ ごおんげえろおお！ やべでえ！ もういやだあ、じゅぎなりだぐりヤイイイイイ！！！！」

真っ赤に泣きじゃくり、体中からだせるもの出し切って喘ぐ。眼球と指先は常に痙攣し、短小ペニスからは断続的にカウパー汁がチョロチョロ流れてつづける。

「そうですね、そろそろ夕食のお時間が迫っていますし……一気に中出しして今日はおわりましょうか」

どっぶぽっぶっぶっぶりゅううううううううううう！！

三時間ぶんの白濁熱汁が肉壺へ詰め込まれていく。下腹部が膨れ上がり、結合部から泡立った汁が漏れ出している。

「ふっぎイいいいいいいいっごおおおお♥♥♥♥」

ギン！ と喉を反らせ咆哮じみた嬌声。舌が唇からはみだしており、視点がふらつき、どこも見えない。肉棒が引き抜かれると、すぐさまブツボ！ っとザーメンを噴射。硬く凝こったクリペニスからも潮を噴く。

「部屋までお送りしましょう」

恭しく、まだ余韻で絶頂しつづける妃を横抱きして雄と雌の臭いが籠った東屋を後にしていった。



「いやあ、変わりたくない、わたくし、もうかわりたくない……」

ベッドの奥で縮こまりながら涙を流す隷属王妃。

魔王と結婚して半年以上が経った。あれほど憎かった魔王ゲゼルガに今では毎日恋い焦がれており、嫌悪していたはずの將軍コンケローも最近では自分の心に入り込んでくる。逆に姫様への想いが薄れつつある気がした。

(ゲゼルガ様でもない、コンケローでもない。わたくしが、一番想っているのは姫様だったのに……)

フカフカのベッドに深く身を沈めながら、現実と夢の境目でロアスだった頃の記憶をなぞりながら眠りに落ちていく。

「ひめさま……ひめさま……あいし……」

夢現のロアスへ、淫紋が妖しく光りながら鎖のよう形状を広げ肉体へ張り巡らされていく。眠りながら発情と魅了が発動し、姫との細やかな記憶の夢が、愛欲の日々に塗り替えられていく。

「……ひめさま……はあはあ……さま……まおうさまあ……」

奴隷印が光るたびに身体は小さく跳ね、寝汗と火照り紅潮し艶めかしくなっていく。

「ま……さま……すき……あいして……はあう、くうん……」

熱く息を吐きながらもっと深い夢へ落ちていく。さらに淫紋は今日の記憶、コンケーロとの逢瀬も強く心身へ刻み込んで、偽の愛情を植え付けていく。

「あああ……♡ こん、けえろ……わた、くし……の……はあああ♡」



コンケーロ率いる部隊の長期遠征が決まった。あまりにあつという間の決定と早すぎる出発日に、ロアスはコンケーロとの逢瀬は叶わなくなり、顔を合わせることができたのは遠征出発の当日、出発直前の城門前。

「確か……遠征期間は半年ほど、でしたか」

「そうでございます。王妃様、どうか私の無事を祈っていただきます」  
「……貴方の安否などどうでもいいわ」

彼らが向かう先は人間の住む領土で、彼らが進めば進むほど人間達は住処を追われ、殺されていくだろう。

(それなのになぜ、わたくしは彼の帰りを願うのだろう……)

口にはださない。だしてしまえば、自分のなかに芽生えつつ黒竜人への感情を認めてしまったことになる。

「出立前に恋人らしく、キスの一つでもしてほしいです」

「キスは、遠征から帰った後でもできますよ」

(なぜこんなことを……わたくしは言ってしまったの?)

「おや? 私の安否などどうでもいいのでは?」

「……っ」

「ふふ、意地悪でしたかね? では、キスは帰って来てからのお楽しみにしています」  
そしてコンケークを先頭に遠征軍は旅立った。

(魔王様は淫紋のせいなの、そのせいでできるの。なのにコンケークとは淫紋とも魅了と

も縛られていない)

憎んでいるはずの相手に肉欲で絆されている事実が重くのしかかる。

(なんて最低な騎士だろう……わたくしには姫がいるというのに)

「——すっかり、將軍にお熱だな」

「魔王様」

マントを翻して隣に魔王ゲゼルガが現れる。どことなく不服そうな表情なのは気のせいだろうか？

「魔王様、どうか抱いてくださいますし」

「今宵な」

(早く、早く夜になればいい)

魔王に抱かれ、愛に狂ってしまえばそれは魅了の呪印のせいに見える。コンケーロを見送りながら、ロアスは早く夜になることを強く望んだ。

## 8 哀れな雌豚おとめ

「なに、半年ほどの奉仕活動だ。これも妃の務め、わかってくれるな？」  
「……はい、魔王様が仰のならわたくしは、どんな命令にも従います」

魔王城内部の兵士専用トイレ隷属王妃が肉便器として設置されていた。

出入口から小便器がずらりと並ぶ一番奥、便器ではなく壁から飛び出た生尻があった。壁尻の向こう側にもトイレがあり、そこからはピンク色の唇のみが壁からでてくる。

魔王ゲゼルガの「半年ほどの奉仕活動」という命により、トイレに設置され休むことなく魔物たちの精液便所になっているのだ。



「お、んごっほぶぢゅうううううう」

(喉マ×コも、ケツマ×コもお、おっきいのがきまひひゃあああ)

人間の男とは比べ物にならない雄々しい肉棒。思わず唇が窄まり、ジュボジュボと息を吸い込み子種を望む。フェラに夢中になりすぎて全身が力み尻穴が卑猥に絞まり、腸壁がくねり動き腸ヒダで雁首や竿を攪り回した。

「おおお！ くっそ動いてねえのに射精しちまいそうだぜえ！」

尻穴を犯す魔物がうめいた。そのまま臀部に爪を喰い込ませながらパンパンと腰を打ちつける。

パンパン！ パンパン！

「ほおおおっぐううういぐう♥ いぐうう♥ ふっぐうううう♥」

強烈な打撃快楽。不自由な身体が堪らず動き、衝動を発散させようと喉奥までしゃぶりつき思い切り腔内を犯すペニスへむしゃぶりつく。

「んっごおお？！ この口マ×コすげええ……！ チ×コが……おおおっ！」

反対側のトイレにいる兵士が声を上げる。王妃の腔内を犯す兵士は耐えられず、すぐさま射精した。

ドッビュブブ！ ブビュルウルル！

濃厚なザーメンが喉に絡みつき、食道を淫熱で燻らせる。





濁流のごとく雄汁が喉を焼尽していき、一滴も残すまいと尿道へ舌先をねじ込めば兵士の痙攣がペニスから伝わってくる。

「はあはあ、これが俺達を殺しまくっていた英雄サマとかハハッ」

「町の娼婦よりすげえし、しかもタダとか最高だな」

それぞれ独り言を吐きながら、ほぼ同時にペニスを引き抜きトイレを後にする兵士。口と肛門から肉棒がなくなると、しばしの休息が訪れた。雌豚王妃にとってこの休息は苦痛の瞬間だ。

（はあはあ……足りない……旦那様の、ゲゼル様がほしい……）

魔物たちの精力は人間の男に比べれば圧倒的なものだが、魔王と比べると物足りない。

いつもあと一步の所で吐精し、萎えて、終わってしまう。魔王ゲゼルガ以外で途方もない悦楽を与えてくれるのは情夫である將軍コンケーロぐらいだろう。しかしコンケーロは遠征に赴き城にいない。

（肉便器にされてから、どれだけの時間がたちました？ なぜずっとこのままなの？ 魔

王様の、ゲゼルガ様のがっほおおっほほお♡）

「鼻アグメえぎまじひゃわああほっごおおオおお♡♡♡」

壁の中ではロアスは鼻フックで顔を無様に歪められている。鼻腔には管が挿入されており、そこから餌として定期的にザーメンが流れてくるのでこれで最悪、肉便器王妃を使う魔物がいなくとも、鼻から注入される精液をドレインして飢え死にすることはない。

どぶどぶ、どぶどぶ。どぼぼっぼぼぼっ。

「おっごおおお♥　ごい、ごいおせーし♥　いぐ♥　鼻でいぎまじゅうううっごおおおザーメンドレインぎぼぢいいいいれひゅうううう♥♥♥」

(こ、この濃いおせえし、は絶対魔王しゃまのでひゅわあ♥　あああっ魔王さまおうさままおうさままおうさまあああ♥♥♥　ロアスの雌ケツマ×コも口マ×コも鼻マ×コもすべてすべて魔王ゲゼルガさまお一人だけのものでひゅわああああ♥♥♥) 鼻から喉へ落ちていくザーメンに腹の奥がキュンキュンと疼く。欲しい、欲しい、そう願った瞬間、下腹部を圧迫する熱塊。

ズボ、ズボヂュウウうううグヂュウウううう!

「お、おおおっ♥　お、おひりい、おひりい、の逞しいのがきひゃ、きまひひゃわああ♥」

ものの数分で休憩がおわり肉便器業務がまた始まる。

尻穴を塞ぐ熱塊に歓喜。さらに生尻が飛び出ているトイレでは、魔物が勢いよく尻を平





「おおお、おっご♡ あぢゆ、あぢゆい、あぢゆいれひゅっぶうっばあ、おおおっぼおん  
っごおおおお♡♡♡ お、おおおおっ♡♡♡ いぐ、っっっぎまひゅううううう♡♡♡  
くくっぐうう、いっぐ♡ いっぎまひゅううう♡ 雌豚王妃いっぎゅうううううう♡  
♡♡♡」

壁の中で白目を剥きながら何度も達する。数秒ごとに気絶と覚醒を繰り返す。そんな王妃のことなど一切きにかげず魔物兵士たちが次々と群がり、肉棒を突き立てていく。

「次は俺だ！」

「オレだよ、オレ！」

「いいから、はやくブチ犯せろ！」

我先にと王妃の唇とアナルを巡り、さらに四方八方からブチ撒けられる小水、ザーメン、先走り汁。雄の汗塗れになる姿はまさに肉便器だった。



六カ月後――

「ほお、ほお……おおおん……」

## 9 絶望の帰還

王都から遠く離れた村――

「いやあ！」

「助けてくれ！」

「ママ、パパ、怖いよ！」

いきなり現れた魔王軍に逃げ惑う人々。小さな村はあつと言う間に魔物たちに占拠され、村の一家所に集められた。

「さて、人間共。いきなりで悪いが、今日からここは我が魔王軍の拠点地となり、貴様らは我らに服従する奴隷となってもらう」

魔王ゲゼルガの発する威圧感に人々は戦慄き、あまりの絶望に涙すら流せない。有り得ない奇跡を村人が願ったその時だった。

「ぐわあ！」

「ぎゃああ！」

村の出入り口を見張っていた魔物が二体倒れて、一人の青年が立っている。剣を手にした青年の、金色の目で真っすぐ魔王を射抜く。

「き……奇跡だ……！ 奇跡が起きた！」

「英雄騎士ロアス！」

「ロアス様だ！」

何年も前に行方不明になり死亡していたと誰もが思っていた。

寸前の所で現れた英雄騎士に人々は希望を取り戻す。

英雄ロアスは人々を安心させるよう穏やかな笑みを浮かべたまま、魔王ゲゼルガの傍まで歩いていく。魔物たちが、騎士の威風堂々に圧倒されて自然と左右に分かれて魔王の元まで道をつくっていく。

「魔王ゲゼルガ」

「会いたかったぞ、勇者ロアスイヤ——我が隷属妻のロアス」

魔王が言葉を発した次の瞬間——

ヂョロ、ヂョロロロ〜ジョボボボボ〜！

緊迫の状況にそぐわない音。アンモニア臭。みるみるうちに武装した英雄の股下に黄金の水溜りが広がっていく。

「ああ、そうでしたわ……今日はドレスじゃなかったわ……おお♥」  
両手がスカートを掴む仕草をしながら、ブルリっと身を震わせる。

「え？」

「……なに？」

「ロアス……様？」

訝しがる人々へ騎士は振り返る。依然と穏やかな笑みのまま、ロアスは両手を頭の後ろにおき、ゆっくりと腰を下して蟹股のポーズ。

「お、お♥お、いっく、いっぐ、いっぐううう♥」

ぶり、ぶぢゅう、ぶっびいいいい!

けたたましい音と一緒に尻穴を覆っていた下着がポッコと膨らみ、破けていく。裂けた布の合間から、スライムがポトポト落ちてくる。

「うんぢいアグメいっぐううう♥ いっぱいでくりゆうううっほおおお♥ ずっとウ





る。

短かったブロンドがどこまでも長く伸び。男にはないはずのたわわな乳房、丸みを帯びた腰、布を突き破らんばかりの桃尻が純白のマーメイドドレスに包まれる。まるで天の遣い、女神のような美しさ。しかし傍らには魔王がおりその腕の中で恍惚に顔を染め、魔王と同じ暗黒色のティアラを頭に掲げている。

「貴様らの希望だった英雄ロアスは、魔王ゲゼルガに屈服し我が隷属妻ロアスとなった。もう貴様らを助ける英雄はいない」

ドレスは大胆に臍部分をカットされており、そこからゲゼルガの所有印である淫紋みせつける。ゲゼルガの紫色の指が淫紋を撫でれば「ああ♥」甘い声で鳴き、自分から魔王へ体をさらに密着させた。

「な、なんで！ どうしてですか、勇者様！」

「だって、わたくしは♥ ゲゼルガ様を愛してしまっただから、もう戦えない、愛してるから♥ もう戦えないの！ んひいいい♥」

（愛してる……？ ゲゼルガを？ 両親と妹の仇を？ そう、愛してる♥ 愛してしまっただの♥）

恨みがましく見上げてくる民の目線に申し訳なさと、それを上回る快感が淫紋からこみあげてくる。微かに痛む理性すら被虐快樂のスパイスだ。

「くう、ふううう ♡ いく、いっひやうううマゾ雌英雄いきまひゅわあ ♡ いくういぐいぐうんっほおおおお ♡ ♡ ♡」

プシュー！ プシユルルプピユシユウウー！

愛撫される淫紋が輝く。アナルからスライムを、乳首から母乳を、肉芽から潮を噴きながら弓なりに背筋を反って白目を剥く。自分を英雄と慕っていた人々に痴態を見せつけるのは、申し訳なさと恥ずかしさが興奮剤になってしまう。

「さあ、其方が命令しろ」

魔王の指が頬を滑り唇を撫でてくるだけで、頭の奥がじゅわっと熱で蕩けて大事な籬が簡単に外れてしまう。

「兵士よ、人間を労働奴隷と苗床奴隷に選別……しなさい ♡」

王妃の命令に魔物兵士が咆哮し、村人へ襲い掛かっていく。小さな村はあっという間に悲鳴と怒号が飛び交う地獄となった。

（わたくしはなんてことを……）

魔物に首輪をかけられ、選別されていく人間を茫然と眺めているとゲゼルガに唇を奪われた。どこまでも甘く優しいキスに場違いにときめいて、腰を砕けさせてしまい支えられない。

「すっかり堕ちたな、英雄騎士ロアス」

「あ、嫌、その名前を呼ばないでください」

「守るはずだった人々を弄ぶとは、其方は残酷だな」

「こ、これは……姫様を助けるため……。姫だけは助けると魔王様がおっしゃったから……」  
人間の国へ本格的な侵略を再開すると魔王が宣言すると、ロアスは「どうか姫様だけはお助けくださいませ!」と泣いて縋りついた。ロアスの願いを魔王はあっさり聞き入れ、代わりに民衆たちへ痴態を披露することを求めたのだ。

「去勢され仲間を殺して、女の心を持ち、我が子が欲しいと咽び泣き、拳を守るべき存在を嬲り弄ぶ——英雄とし騎士として、男としての其方が死んでいく……なんとも心地が良い。まだまだ、絶望するのは早いぞ」



10 地獄の幸福

ついに魔王ゲゼルが率いる魔王軍は、王都まで侵攻。  
瞬く間に都を制圧し城も完全占拠。王国は魔王の手中におちた。



「お、ふっご♡」

全裸で獣のよう歩くロアスの背に乗りながらゲゼルガが悠々と城へ入り姿を見せる。雌豚王妃は、ゆっくりと王の間を指して手足を動かした。

（あ、ああ……城が……）

既に王都は魔物により占領されて、逃げ出す隙がどこにもない。それは城も同じで、魔王の手に落ちた城には魔物が溢れかえり好き勝手していた。兵士が翻られメイドが犯され大臣が食い殺されている。あちこちから聞こえる悲鳴と絶叫。

（姫様はご無事でしょうか……）

バッチイイイン！

「キャンウウウッ！」

あまりにももたつく雌豚に痺れを切らした魔王に尻を叩かれる。骨が砕けたかと思うほどの痛みとマゾ快感が、巨大な桃尻に伝播し背筋を弓なりに反らす。

「ご、ごめんらひゃいお、おゆふひを……おお……♡」

それからも一定の間隔で尻を叩かれ牛歩の歩みで王の間に辿りついた頃は、ロアスの尻は真っ赤な手形で埋め尽くされていた。

魔王からの仕打ち一つ一つが愛おしく、気持ちがいい。王座のすぐ傍まで来ると腫れあがった尻を見せつけるよう掲げた姿勢で、ロアスは虚ろな目で突っ伏した。誰も座っていない玉座に魔王が腰掛けると、開きっ放しの薔薇肛門からブヂュルル！ と寄生スライムを噴きだす。

「相変わらず立派な雌豚だ」

「お……おお……♡」

「そら、舐めろ」

ゲゼルガの足が突き出され、突っ伏したまま靴を舐めだす隷属王妃。暫くの間、靴を舐

める音だけが王の間に響いていた。敬愛の念を込めて舌を動かす王妃を、心底魔王は嬉しげに眺めていたが、メイドの集団がやってくると靴舐めをやめさせる。

「其方は王妃に相応しい衣服に着替えてくるがいい」

「はい……」

メイドたちに連れていかれ、ロアスは一時王の間を去り、入れ替わりに別の扉から、この国の姫が縄に縛られながら連れてこられた。

「初めまして姫様」

「魔王ゲゼルガ……!」

ほんの数時間前まで自分が座っていた王座に、悠々と腰掛ける魔王ゲゼルガの姿に姫が唇を噛みしめ、憤怒の形相を浮かべる。

「座り心地は悪くない椅子だな」

「……っ!」

どれだけ両者睨みあっていたか。やがてメイドが一人やってきて魔王へと深々と頭を下げた。

「魔王様、王妃様の準備おわかりました」

「連れてこい」

魔王の視線につられて、姫も扉を見て唾然とする。

「ロアス、様……？」

凛々しい青年騎士だったはずの想い人が、この場で一番華美なドレスに身を包んで現れたのだ。

スカートはフリルで段をつくり、メイドが左右からドレスの裾を持っている。背中には大きな純白のリボンが蝶々の羽のよう巻かれていた。自分でもまだ着たことない、ウエディングドレスを思わせる純白の装い。男装姿のメイドに腕を組まれながら歩き、メイドの一人が背後からヴェールを持っているので、猶更結婚式の新婦入場を思わせる。

「おお、来たか我が妻」

魔王が極上の笑みを浮かべ、姫は青白い顔でただぼんやりとヴェールに隠されている想い人を見つめた。

「ロアス様」

姫に名を呼ばれて数秒後に金色の目から涙が零れる。

ヴェールに顔を隠され、しかし薄絹のヴェールからでもはっきりとわかる金色の双眸。



純白のドレスに隠れて分かりにくかったが、ロアスは真珠の首輪をしていた。それが、彼がどういう立場にいるのかを知らしめてくる。

「……………情報を探りに出た兵士の話しは本当だったのね、貴方が魔王の手に堕ち、口にするにも憚られるあらゆる方法で民衆を弄んだと」

「姫様」

思わず口が開いたが、何も言えず視線を逸らした。

「なぜ、そんなことに」

「姫を愛するが故だ」

「なんですって」

「姫の純潔を散らされたくなければ我に従い我が妻になれと、男を捨てろと申したらな、英雄騎士は愛しき姫を守るために男であることを捨て、祖国を裏切ったのだ。なあ？」

メイドたちが音もなく引き下がり、今度は魔王の腕の中に閉じ込められる。ゲゼルガの逞しい腕が腰に腕を回されるだけで、一瞬で頭がクラツと熱く酔うが、茫然としている姫に胸がチクチクと痛む。

「つまり魔王、貴方は脅しの一つもしないと好いた相手に告白もできない臆病者だったと

うわけね」

「姫様！ 下手な挑発はおやめください！」

「本当のことでしょ？ 魔王ゲゼルガ、我が国を壊滅させた恐ろしい存在だと思っていたけど、とんだ小心者だったのね！ ああけど、そうね、私の英雄騎士を見初めた審美眼だけは評価してやっても良くてよ！」

「……姫様」

（ああ、そんなこと言われたらわたくしは……俺は、期待してしまいます）

国を裏切り、王都に戻ってくるまでに大勢の人々を苦しめた。何より心身ともに魔王を愛してしまっている。なのに「私の英雄騎士」、この言葉を聞いただけですでにゲゼルガに支配されきったと思うていた心から愛しく温かなものが溢れて満たしていく。

（……俺は、まだ姫様を愛している……愛していたんだ……）

「フン、チャンスを与えなくなるほど反吐がでる美しい愛だ」

パチン。些か不機嫌に魔王が指を鳴らした途端、

「あ、ああああああああ？！！ お、お腹があつう……！！」

ロアスの下腹部を中心に熱が爆速的に集まりだし腹から桃色の光が飛び散っていく。あ

まりの熱さに叫んでいたが、いきなり、騎士を支配していた魅了の淫紋が跡形もなく消失。

「……はあ、はあ……お、おれ、は、俺は、いったい……？」

「ロアス様！」

「気分はどうだロアス」

「……………いきなり……………なに、が……………？　っ、魔王？！　俺に触るな！　いままでよくも呪いで俺を愚弄してきたな！！　四年間受けつづけた屈辱……貴様の死をもって償ってもらおうぞ！」

常に身を焦がしていた淫蕩な衝動がすっきりし、同時に魔王に対する愛情も忠誠心も急激に失せていった。自分のドレス姿と重たい胸に強烈な違和感しかない。

態度が一八〇度変わった隷属妻を気にすることなくゲゼルガは抱擁をほどこいた。ただただ笑っている。

「一つ、ゲームをしようと思っただけ」

「ゲーム、だと」

「一時間、淫紋を解除した身で我の雄を一度受け入れる。だが我は一切射精をしない、其方が“子種を恵んでくださいませ”などと射精を求めぬような言葉を吐かなければ、其方

の勝ちとして国を諦め、二度と手出しはしないと約束しよう。其方も自由の身だ。ただし、負けたら二度と消えない淫呪をその身に刻ませ其方もこの国も魔王ゲゼルガのものとし、姫はオークの長の嫁として嫁がせる。因みに我が我慢できずに射精しても其方の勝ちとしよう」

「この……相変わらず下種な……!!」

ふざけた話に怒りで目の前が真っ赤になる。ドレスが重たく動けないが、全裸のままだったら殴りかかっていただろう。

「無力なその身で我が提案を受け入れる以外の選択肢があると思っっているのか？ 嫌ならば問答無用で、この国を奪い、其方に淫紋を刻んで我が雌奴隷妻として扱う」

「……っ」

ちらりと姫を見れば覚悟を決めた目をしている。

「信じている。私の英雄騎士」

「姫様」

まだ自分を信頼してくれる姫の心に、ただただ涙が溢れてくる。

「ならさっそくゲーム開始だ」

玉座に座ったままのゲゼルガが既に勃起しているペニスを堂々と晒し、重たいドレスを身に纏ったロアスを軽々と抱き上げる。ゲゼルガに触れられる箇所には鳥肌が立ち気持ち悪くてなんとか吐き気を堪えつつ、緩んでヒクつく肛門孔に眉を顰めた。

(なぜ、俺はこんな侮辱を喜んで受け入れていたんだ……)  
魅了の呪いに怖気が走り背筋が寒くなる。

「はやく、しろ」

「そう急いでいいのか？ 後悔しないだろうな？ ククッ」

「誰が貴様なぞ、俺は貴様なんぞ……ふっぐうんっ」

ぬちゅ、ぐちゅ。龟头が押しつけられ、先っぽがアナルを拡張する。

(俺は絶対負けない、淫紋などないいま、魔王相手に感じるわけなどない！)

ロアスが覚悟を決めたと同時に肉棒が尻孔を貫きはじめ、

ズブズブ……ズヂュウウグヂュウウウウ！

「くっっお、おおっほおっほっひいひいっくうううううう♥」

あっけなく決意は砕け散った。肉棒が肉壺を貫いた瞬間、下腹部がキュンキュン疼く。歪な肉芽がドレスのなかで勃起し、母乳が乳腺の奥で熱く渦巻いた。



抉り快樂の打撃を腹へ打ち込んでくる。

「メスチ×ポラめえくる、しゅぎきひやうううう♡ いぐ、いぐいぐううまおうひやま  
あああ♡♡♡」

ごつぶぢゆうううう…ズブツ、ドツチュン！

ついに根元まで埋まった肉棒。魔王の股間に尻が行儀よく着席する。両脚が硬直しながら、ヒールを履いた爪先がピクピクと痙攣している。

「くくくおおおっ、ふ、ふっきやああっ♡♡♡」

ヴェールに隠れている金の瞳は無様に裏返り、口紅をひいている唇からは涎が無制限に溢れている。

「まだ五分も経っていないが、降参するか？」

「しゅ、しゅるわきえりゃいれひよお♡ふっぎイ♡ ま、まげえ、りゃいんらからあ♡ ひ、  
姫を、ま、まもおっほおっごお♡♡♡」

ぐぢゅ、ずつぶうううん！ どっぢゅん！ どっちゅん！

一回ごとに重々しい突き上げ。ドレスの上から腹がポコツと浮かび上がり、何重ものレースとフリルが軽々と舞い踊る。背中のリボンがまるで魔王に抱かれることを喜んでいる

よう飛んでいた。

「ひゅ、ひゅっごおっほっひいひいひい♥ げぜりゆがあんおほお雄チ×ポおせっひゅ  
っくうううう♥♥♥ で、でもおおっほ、まげ、まぎえらあいい、まげりゆもの、れふ  
うっがあああっほおおお♥♥♥」

（お、俺が愛している、のはあ、ひ、姫様、だけえらああ！ ま、魔王は、魅了、そう、  
魅了のひえいっほおおおお♥♥♥）

自分がどんな口調で叫んでいるかも碌に自覚できていない。淫紋は消えたがこの数年間に  
植えつけられた「メス」としての言動がしっかりと精神に刻まれている。

「こんなに乳首をピンピンにさせておいて、何が負けないだ」

グイ、グツグツ。服ごと乳首を引っ張られ、背筋に電流が走り猛然と腰を動かしてしま  
う。魔王の指が動かたび、それに合わせて重たいドレスも難なく踊り狂う。

「めえ、めすくりいいいちくびいいいいいっぐうううう♥♥♥ オ、おおっ、ちくびい  
じめりやれてえ、ケツマ×コぐぼぐぼしゆるのもとめりやれないいいいい♥♥♥」

じゅぼじゅっぼぢゅっぼおおおっ！

アナルは巨根に吸いついたまま、吸着音が聞こえてきそうなほど窄まっている。



## 英雄おとめ墮天

発行日 2019年 5月 6日  
著者 カルビ  
発行 焼肉文庫  
Pixiv 12050686  
Twitter @ACND64RH63  
Mail buekbe2@gmail.com  
印刷所 コミックモール  
備忘録  
表紙 ヴィンテージゴールド 107 kg

本文用紙 書籍用紙クリーム 62kg

タイトルフォント うつくし明朝体

本文フォント こころ明朝体

十八禁文字フォント ChopinScript (*ChopinScript*)

行・文字数 15行・40文字  
上 15mm 下 15mm 内側 15mm  
余白 外側 15mm とじしろ 3mm

本書は成人向けです。18歳未満の方の目に触れないようお願いいたします。  
無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。

ネットオークション、フリマアプリでの転売はご遠慮ください。

処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、中身が分からない状態にいただいた上で可燃ゴミとして廃棄してください。